

創立期のサラマンカ大学

— 王権と大学 —

林 邦 夫*

(1989年10月16日 受理)

La Universidad de Salamanca en la época fundacional

: El poder real y la Universidad

Kunio HAYASHI

はじめに

スペイン最古の大学¹⁾は1200年頃に設立されたパレンシア大学であるが、これは13世紀中頃に消滅した。現存のスペインの諸大学の中で最も長い歴史を有するのはサラマンカ大学である。本稿は創立期（創立からアルフォンソ10世治世末年まで）のサラマンカ大学と王権との関係を中心にして考察を加え、これを通して創立期のサラマンカ大学の基本的性格を解明しようとするものである²⁾。固よりサラマンカ大学は中世スペインの唯一の大学ではないが、これを取上げ考察することで、大学という新たな制度が、スペイン中世国家において果たした役割が多少なりとも明らかになるものと考えられる。

I サラマンカ大学の創立年代

まずサラマンカ大学がいつ設立されたのかという問題を検討しよう。これについては確たる定説はなく、次のような諸説に分かれている。

- (1) 1200年説 R. Gibert³⁾, J. Lalinde Abadía⁴⁾
- (2) 1215年説 A. García-Gallo⁵⁾, A. Jiménez⁶⁾
- (3) 1218・19年説 J. González⁷⁾, V. Beltrán de Heredia⁸⁾, J. Fernández Conde⁹⁾, J. M. Pérez-Prendes¹⁰⁾, L. de Echeverría¹¹⁾, A. Rodríguez Cruz¹²⁾
- (4) 1227年説 H. Rashdall [の改訂者]¹³⁾

設立年代の考証材料となる史料は次の通りである。

* 鹿児島大学教育学部社会科

史料1 サラマンカ大学の回廊にある碑銘文(16世紀末)¹⁴⁾

「主の年の1200年、カスティーリャ王アルフォンソ8世、パレンシア大学を創立せり。レオン王アルフォンソ9世、これに倣いて、同じくサラマンカのアカデミアを創立せり」。

史料2 カスティーリャ王フェルナンド3世の証書(1243年4月16日付)¹⁵⁾

「余の父〔アルフォンソ9世〕が彼の地〔サラマンカ〕に^{エスグレラ}大学を設立せしその時代に」。

史料3 Tuy司教(1239-49) Lucas de Tuyの *Chronicon Mundi* (1236年のやや後に執筆)¹⁶⁾

「レオン王アルフォンソは、その息〔カスティーリャ王〕フェルナンド3世と和議を結んだとき、彼より援助を受けて、王国内の反乱者を征圧した。そして大規模な軍勢を集め、サラセン人に対して戦端を開き、カセレス周辺の一切のもの、即ち、樹木、ブドウ畑、耕地を戦火をもって破壊し、帰還した。

ここに有益な助言により、聖書に精通した教師たちを招聘し、サラマンカの^{スコラ}大学を創立することを決めた……。

ポルトガル王がレオン王国を攻撃したので、アルフォンソ王は San Esteban de Cavias という自らの城を攻囲し、これを奪還した。しかしポルトガル王と和平を結び……」

史料4 フランシスコ会修道士 Gil de Zamora の *Liber illustrium personarum* (1282年以降執筆)¹⁷⁾

「王アルフォンソと王妃ベレンゲーラは、上記の子供たちを儲けたが、血縁関係の故に教皇インノケンティウス3世により離婚させられた。その後、王の間での戦争と劫掠が暫時、熄んだ。王が近隣のすべての王から脅やかされたときは常に主が彼を扶け給うた。神がより一層扶け給うようと、王は自らの収入でストゥディウム・ゲネラーレをサラマンカに創立した。……ポルトガル王が自らを攻撃したとき、アルフォンソ王は San Esteban de Cavias と呼ばれる自らの城を攻囲し、力でもって征服した」。

以上の史料によって(1)~(4)の諸説を検討してみよう。

史料1からは、サラマンカ大学が1200年に創設されたとは必ずしも取れないが、(1)の論者は恐らく史料1を根拠としているものと推定される。仮にこれが1200年創設を示していると解釈出来るとしても、作成年代が16世紀末とかなり後のものであること、大学自身の作成したものであり、伝統を誇るために殊更、創設年代を古くした可能性も考えられ、信頼性に乏しいと言える。

史料2はアルフォンソ9世(在位1188-1230年)がサラマンカ大学を設立したことを明確に述べている。古い年代の、しかも国王の息子の証書であり、信憑性に疑問の余地はない。

(2)説の創始者と思われる La Fuente はとくに根拠を示していない。Rashdallの改訂者は、La Fuenteは1200~30年の丁度間をとって1215年頃にしたと推測している¹⁸⁾が、何れにせよ大雑把な推量であり、今日の段階では、最早受入れ難い。

史料3は年代的に最も古いので信頼性が高く、設立前の状況に触れているので設立年代を特定す

るのに有益な史料である。アルフォンソ9世は、1219年の復活祭までを期限とする休戦条約を1217年11月に息子のカスティーリャ王フェルナンド3世（在位1217-52年）と結び、1218年8月26日には講和条約が結ばれ、これによってイスラムとの戦いが続行可能となった。このときアルフォンソ9世はカセレス攻囲を試みるが、降雨にたたられて撤退を余儀なくされた。史料3はこのカセレスからの帰国後に大学を創立したとしている。そしてその後には、ポルトガル王のレオン王国攻撃とポルトガル王とアルフォンソ9世との和約が記されているが、この和約は1219年6月に締結されたから、設立年代は1218年8月26日～1219年6月の間に収まることになる¹⁹⁾。

史料4は設立前の出来事として、王妃ベレンゲーラとの離婚（1204年）、和平（1218年8月26日）、を挙げ、設立後の事件としてポルトガルとの戦争を記しており、史料3とほぼ同じ内容であるが、設立前の記述は史料3の方が詳しく、史料4は更めてこれを確認しているという点で意味があると言えよう。

結局、史料3・4、とりわけ前者から、1218・19年が最も妥当な設立年代と結論出来る。

ところでRashdallは唯一人、1230年の少し前としている。彼は史料3を引用しており、何故かかる立場をとったのかそれのみでは定かでないが、改訂者は、カセレス攻撃は1218、1222年になされたが、占領は1227年のことだ、と註記している²⁰⁾。つまり、彼らは史料3の記述を1227年のカセレス征服のこととしているのである。しかし、原文はカセレスの周囲を劫掠したとあるのみで、占領したとは記していないし、また上述のように1219年のポルトガルとの戦争・和平がその直後になされているのだから、1218年の攻囲の記事と見做すのが妥当で、Rashdall及びその改訂者の見解は否定されるべきである。

次に何故、サラマンカが大学設立地として選ばれたのかを考えてみよう。

Beltrán de Herediaはこれについて、第1にレコンキスタの進展につれて、サラマンカが王国の中心に位置するようになるという地理的位置の優位性、第2に城塞と広い属域を具えている主要都市であること、第3に健康な大気と豊かな物産の地であることを挙げている²¹⁾。

当時のレオン王国の領域を見ると、サラマンカは決して中心とは言えず、南に偏した位置にある。しかし将来の南方への王国の拡大を考慮すれば、やがて王国の中心となるべき位置にあると言える。第2の理由については『第一総合年代記』から引用がなされている。「サラマンカ市は、多くの住民と大きく広い属域をもつ点で、レオン王国の他の都市を凌駕している」²²⁾。かかる記述を直ちに受入れ、サラマンカを当時のレオン王国の最大の都市とするのにはなお検討を要するが、主要な都市の一つであったことは確かであろう。第3の理由について、サラマンカがかかる風土であったことは、1255年4月6日付の教皇アレクサンデル4世の大勅書に「汝〔アルフォンソ10世〕は、極めて豊沃といわれるサラマンカ市、レオン王国の中で健康的な大気をもち、誰にでも快適であるが故に選ばれたこの場所に、……スタヂウム・ゲネラーレを創設した」²³⁾とあるのを根拠としている。この部分は大勅書の発給を求めるアルフォンソ10世の嘆願書に記されているのをそのまま繰返したものと推測される。アルフォンソ10世の祖父にあたる同名の9世が、孫と同じ配慮からサラマ

ンカを選んだとは断言は出来ないものの、アルフォンソ10世の後出の『七部法典』は、「大学は、教師と学生が健康に生活出来、勉学の疲れを癒せるような良い大気と美しい郊外をもち、パンとブドウ酒が豊富で、生活費が安い町に設立されるべきである」²⁴⁾と大学の立地条件を規定しており、かかる条件は一般性をもつものと見做し得るから、あり得ることであると思われる。

以上のようにサラマンカが大学設立地に相応しい条件を具えていたとしても、これのみでサラマンカに大学が設立されたのではない。サラマンカ大学は、何らの母胎もなしに生まれたのではなく、サラマンカ司教学校とサンティアゴ・デ・コンポステーラ司教学校をその前身としている。サンティアゴは大司教座が置かれ、サンティアゴ巡礼の聖地であり、司教学校の伝統もサラマンカよりも古い。これらの点を考えると、レオン王国の最初の大学はむしろサンティアゴに創設されるのが適当ではなかったのか、という疑問が生ずる。この疑問に答えるのが上記の三つの理由である、と我々は考える。第2・3の理由に関しては、サンティアゴがサラマンカに比して著しく劣っているのかどうか、我々は明確に答えるだけの知見をもち合わせていないが、左程大きな逕庭があったとは、思えない。重要なのは第1の理由ではなかろうか。王国の各地から、教師・学生が到来することが予想される王国の最初の大学の設立地としてサンティアゴは余りにも偏った位置にあることは否定出来ず、しかも王国の南方への拡大につれて、偏よりは増大していく訳で、このために司教学校としてはサンティアゴよりも歴史の浅いサラマンカが選ばれたのであろう。実はこの他にもサラマンカが選ばれた重要な理由があるが、これについては後述する²⁵⁾。

次にここで挙げたサラマンカ大学の二つの制度的起源について見ていこう。

II サラマンカ大学の起源

〔1〕 サンティアゴ司教学校

サンティアゴ教会の再編を企てた司教 Cresconio が召集した1063年の教会会議の決議は、司教座聖堂に学校を設置することを命じている。これが司教学校の存在に関する公式の最初の知見であるが、後にレオン司教となった Don Pelayo (在位1065-1085年) が、11世紀30年代頃にサンティアゴで学んでいるので、これ以前に何らかの学校が存在していたことが考えられる²⁶⁾。1095年には学校の存在が初めて確認され、校舎が設けられて文法・修辞学・詩学・弁証法が教えられていたことが知られる²⁷⁾。サンティアゴ大司教 Diego Gelmírez (1100-20年司教, 1120-40年大司教) は、聖職者たちをフランスに留学生として派遣し、またトスカナ人 Raniero, フランス人 Hugo, Gilaldo などの外国人学者を招聘し、学問の振興に寄与した。1168年には留学する聖職者に留学中の収入を保証する優遇策がとられ、これ以後、フランスやイタリアへの留学生が増加した²⁸⁾。サンティアゴにおける学問の隆盛には大司教の奨励策の他に、巡礼地としての性格も影響したと考えられる。多くの人物の移動する巡礼路を介して、外国の学者や文物が流入するという条件が学問興隆に好都合なものであったことは言う迄もない。

着目すべきは、学校の栄えたサンティアゴの地の聖職者の中に国王尚書局 (cancillería real) に入り、尚書 (canciller), 書記 (notario), 祐筆 (scriptor) などとして国王の側近くに仕えた人物がいたことである²⁹⁾。

カスティーリャ＝レオン王アルフォンソ 7 世 (在位1126-57年) の治世には、助祭長で後にサラマンカ司教 (1135-50), サンティアゴ大司教 (1140-43) となった Berenguer が書記・尚書として、聖堂参事会員で教師 (magister) の Petrus Gonzalbez が尚書として、聖堂参事会員 Johannes Fernández が祐筆・書記として仕えている。レオン王フェルナンド 2 世 (在位1157-88年) の治世には、助祭長の Fernando Curialis, Mondoñedo 司教 (1153-67?) でサンティアゴ大司教代理 (1162-63), 同大司教 (1168-73) を歴任した Pedro Gudesteiz, サンティアゴ出身で外国で学び、サラマンカ司教 (1166-73), サンティアゴ大司教 (1173-1206) となった Pedro Suárez de Deza, 助祭長 Pelayo Lauro (o de Lor) の 4 人が尚書となっている。なお、重要な事実として、1158年 9 月30日付の証書³⁰⁾において、フェルナンド 2 世はサンティアゴ大司教 Martín Martínez とその後継者に対して王室礼拝堂付司祭と尚書局長官の職位を許与しており、これによってサンティアゴ教会と国王尚書局とのつながりが、制度的・永続的なものとなった。

最後にアルフォンソ 9 世 (在位1188-1230年) の治世を1218・19年以前について見ると、助祭長 Pedro Vela が先王の時代から引続き尚書を務め、その他に聖堂参事会員の Fernando と Juan Arias, 同じく聖堂参事会員でサラマンカ教会の助祭長となった Pedro Pérez が尚書として登場する。書記では聖堂参事会員 Fruela, 祐筆も務め後に尚書となった Pedro Pérez がいる。

ところで前出の Lucas de Tuy の記述には、アルフォンソ 9 世は「有益な助言により」大学を設立したとある。サンティアゴが学問的伝統をもつ土地であったことを考えると、かかる助言を与えたのは、国王側近として仕えていたこれらの聖職者であったのではなかろうか。それでは具体的には一体誰が進言したのであろうか³¹⁾。

アルフォンソ 9 世がかなり以前から大学設立を進言されていて、1218・19年に急に決断したというよりは、進言を受けてから短期間に決意したと考えるのが、前出の Lucas de Tuy の記述からしてより妥当であろうと思われる。だとすれば、1218年当時に側近であった者が助言者であったと考えられる。この当時の尚書は Pedro Pérez であり、書記・祐筆は Miguel Rodríguez であった。Pedro Pérez は遅くとも1204年11月には書記として尚書局にいたことが判明するが、それ以来、尚書 Fernando が1210年に退職するまで唯一の書記として現われ、その間自らが書記として署名している文書の大半を祐筆として作成している。その後 2 年半は彼の名は尚書局文書には現われないが、それ以前の1208年 6 月～1209年 4 月にサンティアゴ聖堂参事会員となっている。1213年 7 月～11月に副尚書 (vicecanciller) として再び現われ、同年12月には尚書となり、1230年のアルフォンソ 9 世の死に至るまでその職に在った。その間、少なくとも1214年 5 月19日以来サラマンカ教会助祭長を務めている。1224年からはサンティアゴ聖堂参事会員、Orense の司教学校学監として現われ、竟にはサラマンカ司教となった (1243-64)。

Miguel Rodríguez は、1214年5月以来、Pedro Pérez の下で書記として働いているが、彼が教師の地位をもっていたことは注目される。

以上、両者の経歴・地位を考慮すると、サラマンカ助祭長や後に同地の司教を務め、サラマンカに地縁があり、長きに亘り、尚書局に在勤して国王の側近として仕え、恐らくはその信任が篤かったものと想像される Pedro Pérez が、下僚であり、教師の肩書をもつ Miguel Rodríguez と合議の上で、国王にサラマンカでの大学設立を進言したのではないかと推察される。

しかし、Pérez が唯一人の判断でかかる進言を行なったとは考えにくく、その背後には彼を支える人脈が存在したと思われる。そこで彼の人脈を探ってみると、興味深い事実が明らかとなる。González によれば、彼はサラマンカ司教 Gonzalo Fernández (1195-1226) の甥であり、また Gonzalo の兄弟には前出の Fruela、それにサラマンカ助祭長で後に書記として尚書局に入る Martín がいた。そして Fruela は前出のサンディヤゴ大司教 Suárez de Deza と親戚であった。このように Pedro Pérez の周囲に目をやるとサンティヤゴやサラマンカの教会に根を張る聖職者 (= 国王官僚) の一族の姿が浮かび上ってくるのである。その多くがサラマンカの教会に聖職を得ていることを考えると、この一族の故地は恐らくサラマンカであったのではなからうか。Pedro Pérez はかかるサラマンカの一族の意向をうけて、サラマンカでの大学設立を国王に働きかけたのではあるまいか。

〔2〕 サラマンカ司教学校

『わがシッドの歌』(Poema de Mio Cid) の中で「学問に良く通じ、いとも思慮深い」³²⁾と謳われた再征服後最初の司教 Jerónimo (1102-20) が既に学校を設立したと Beltrán は推測しているが、学校の存在を窺わせる最初の事実は、前出の Berenguer をサラマンカ司教に選出した Carrión の教会会議にサラマンカの学頭 (archischola) が列席していることである。より直接に学校の存在を示す事実は、1170年6月1日に教皇に承認された聖堂参事会規則の中で、定められた日に聖務を怠った者には衣服手当を支給しないことを定めている条項で、病床にあるか、「若しくは学校にある」(vel in scholis fuerint) のでないならという条件がつけられている条項である³³⁾。この他に教師の肩書をもつ人物が1150年を初出として聖堂参事会員の中に出てくることも根拠として挙げられよう。

Martín Martín に拠って³⁴⁾、教師 (magister) や学監 (magister scholarum) の肩書を伴って登場する人物を挙げていくと、まず前出の司教 Berenguer が1183年の国王証書の中で「尚書たる教師 Berenguer (magistri Berengarii cancellarii)」と呼ばれている³⁵⁾。以下、文書の日付と名前のみを列挙していくと、1150年教師 Pelayo (Pelagio)³⁶⁾、1174年学監 Pedro³⁷⁾、1176-78年教師 Pedro (Petrus)、教師 Randulfo (Randulfus)³⁸⁾、1180年教師 Arnaldo、教師 Pedro³⁹⁾、1191年学監 Pedro Abat (Petro Abat)⁴⁰⁾、1196年教師 Bernaldo (Bernaldus Calvo)⁴¹⁾となる。これ以外の者で教師として González の挙げている人物を列挙すると、Ostensio (Ostem) (1163-64)、Juan Barrao (1163-73)、Cristóbal Vela (1163-73)、Jordán (1182-85)、Juan (1181)、Ricardo

(1173-94), Fruela (1213-) である⁴²⁾ (括弧内は教師と確認出来る年代)。

これらの教師の中で特徴的なのは外国人の多いことである。Juan Barrao はポルトガル人, Ricardo と Randulfo はイギリス人の兄弟, その他 Ostensio, Arnaldo, Jordán も外国人であるという。外国人の到来とは逆に, サラマンカの聖職者の外国留学の例も確認出来る。1163年頃の或る遺言状⁴³⁾ には, ブドウ畑を処分して得た金を, フランスに派遣される4人の聖職者に送るよう定められている。サラマンカ司教学校も, サンティアゴと同様に, 外国人教師の到来や留学生の派遣による外国からの学問摂取によって栄えていたものと推測される。

ところで, サラマンカ大学創立との関連では, 教師の中に Fruela が含まれていることが大いに注目される。Fruela はサンティアゴの聖堂参事会員として出発し, 1187年から1204年まで書記として国王尚書局に務め, その後は恐らく勉学に精励したものと想像され, 1213年にはサラマンカ司教学校の学監として現われている⁴⁴⁾。かかる事実を踏まえて, 更めて大学設立を企てた主体を考えてみると, まずサラマンカ司教で国王から「親愛なるわが養子」(dilecto alumpno meo) と呼びかけられる程⁴⁵⁾, 信任を勝ち得ていた Gonzalo Fernández, その兄弟で尚書局書記を経てサラマンカ司教学校学監となった Fruela, Fruela の後任として, 恐らくはその縁故から尚書局入りし, 書記から尚書となった両者の甥の Pedro Pérez, 血縁で結ばれ, 夫々, サラマンカの教会, 司教学校それに宮廷(尚書局)に関わっていたこのトリオこそ, González の推論のように, 大学設立の発起人であったと考えられる。

III 王権とサラマンカ大学

アルフォンソ9世によって設立されたサラマンカ大学は, その後のフェルナンド3世(在位カスティーリャ王1217-52年, レオン王1230-1252年), アルフォンソ10世(在位1252-84年)の両王によって如何に遇されたのであろうか。大学に関する両王の証書を素材としてこの問題を検討してみたい。まず原本や写本の現存する8点の証書の内容を見ていこう。

〔1〕 フェルナンド3世

(1) 1243年4月6日付⁴⁶⁾ ①サラマンカに学校が置かれることを許し, 命ずる。②大学に到来する教師・学生及び彼らの使用人と, 彼らが持ち来たるすべてのものを余の保護下に置く。③余の父が大学を創設した時代に, 住宅やその他の事柄に関して学生が得た慣習や特権を更めて承認する。④学生は, 平和に真面目に生活し, 町の人々に邪で不埒な行為をしないこと。学生同志や学生と町の人々との間の争いから生ずることは, 本証書で余の任命する人々(サラマンカ司教, 聖堂参事会長, ドミニコ会修道院長など)が監察し, 匡正すること。

(2) 1252年3月12日付⁴⁷⁾ ①サラマンカの学生は, 自分や使用人のために搬入・搬出するものについて通行税(portazgo)を免除される。②学生は王国内をその所持品ともども安全に往来することが出来, 如何なる者も学生が禁制品を搬出するのでない限り, それを没収したり, 学生を捕え

